



idpc

international
development
planning
contest

2011

報告書

開催期間：2011年2月28日～3月3日

国際開発プランニングコンテスト実行委員会

1. 概要

1.1. 実施概要

idpc2011 は下記の要領で開催した。

日時：2011年2月28日～3月3日

場所：国立青少年記念オリンピック総合センター

参加費：13000円

参加者：46人

主催：国際開発プランニングコンテスト実行委員会

1.2. 企画の趣旨

- コンテスト全体を通して

- コンテストの目的

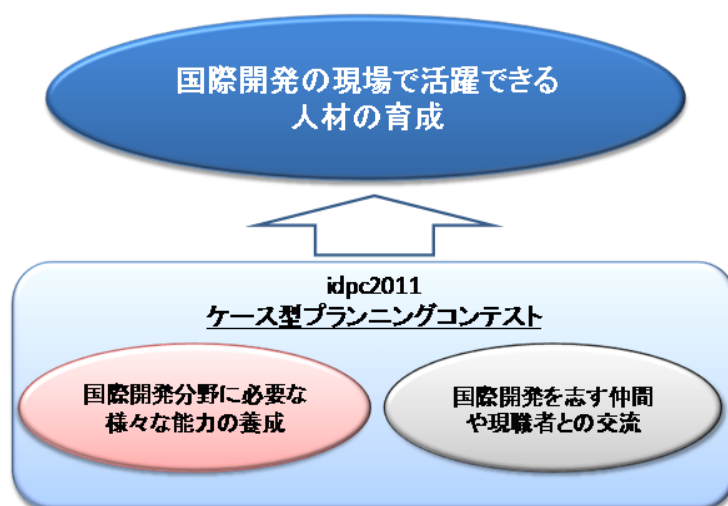
「国際開発の分野で活躍できる人材の育成に貢献することにより、途上国の発展に寄与する」

- 対象者

将来、国際協力分野で働くことを本気で考えており、現在何らかの形で当該分野に主体的に関わっている若者を主たる対象とした。

- 提供する場

参加者の将来的な国際開発分野での活躍を手助けするために、大きく分けて2つの機会を提供することを目指した。



(1) 当該分野で必要とされる能力・スキルを身につける機会

国際開発分野で活躍するためには、語学力や専門知識といった能力は当たり前のこと、論理的思考やコミュニケーション能力といった総合的な能力も必要とされるものと思われる。しかし、学校教育やその他の課外活動を見てみると、語学や専門知識は学校で学ぶことが可能だが、一方で論理的思考やコミュニケーション能力は学ぶ機会が少ないばかりか、必要だと認識されていない場合もある。idpc2011では、これらの能力が必要だと気づき、さらに身につけることができる機会を提供することを試みた。

(2) 当該分野に関係する人達の深い交流の機会

若者たちは同じ志を持つ仲間との交流・議論の場が少ないために、情報交換やお互いをいい意味で刺激しあうことができないでいるという現状があった。さらに、現場で活躍する方々との出会いの場が少ないため、国際協力分野は将来の現実的な選択肢として意識されにくいように思われた。そのため若者は、一時は本気で当該分野への就職を希望するも諦めてしまい、結果として他の分野へ優秀な人材が流出してしまっている現状があると考えられる。そこでidpc2011では、国際協力に関わる縦・横のつながりを提供することを目指した。

● ケースの意図

今回の課題では、企画者から参加者へ3つの「気づき」を与えることを目的とした。

経済発展は本当に良いことなのか

21世紀になり、BRIC'sを始めとする新興国の経済発展は目覚ましい。しかし、これらの国内では深刻な格差問題が発生している。急激な経済成長に伴い、都市部では裕福な暮らしを享受することができる一方で、農村では都市部への人口流出といった問題が発生している。経済成長は確かに望ましいことだが、それにより新たな問題が発生しうることを考慮しなければならないということに対する気づきを狙った。

理想的な社会とはどのようなものか

国際開発分野の問題は、様々な要素が複雑に絡まっており、解決するには時間がかかる。そのため、近視眼的な達成目標にとらわれてしまっただけの本質的な課題にたどり着くことはできない。より長期的な視点を持って世界がどのようになれば理想的かを一人一人が真剣に考える必要があるということに対する気づきを狙った。

有効なプロジェクトとは

ほとんどの学生は問題解決のプロジェクトを策定したことがない。プロジェクト策定に際し必要となるのは、まずはニーズ把握である。ニーズを把握して初めて、プロジェクトの方向性が決定する。その後、実現可能かつ持続可能な案を考えることで有効なプロジェクトを策定することができるということに対する気づきを狙った。

● 審査基準

編み出されたプランは10項目・4段階（-1~2）・20点満点で評価された。10項目はそれぞれ 1) 妥当性 2) 有効性 3) 効率性 4) インパクト 5) 自立発展性 6) 主張と論拠の整合性 7) プランの魅力 8) 資料の分かりやすさ 9) プレゼンテーション力 10) 的確な回答が出来ていたか、であった。項目1~7はプラン内容、8~10はプレゼンテーションに対しての評価となっていた。

尚、項目1~5は1991年にOECD開発援助委員会（DAC）が「DAC評価方針」の中で援助評価手段として提唱した5項目を採用しています。項目7は設定された評価項目以外で優れている部分を審査員個人の主観で評価して戴いた。

減点基準に関しては、プレゼンテーションの際参加チームが制限時間をオーバーした場合には総合得点から5点の減点を行った。

2. コンテスト当日

2.1. 全体のスケジュール

1 日目

初日は、日本各地から 46 名の参加者が初めて顔を合わせた。5 人 1 組のチームでこれから 4 日間プランニングをしてもらうことになる。「アイスブレイク」で打ち解けてもらった後は、「プレゼンテーション講座」を受け、実際にプランニングに移った。ケースの分量が過去最大であったため、その解説に苦勞している様子が伺えた。

2 日目

2 日目は、プランニングの合間に職業多様性をテーマとして、多くの現職者の方との交流が行われた。社会起業家の方を招いた「テーマ講演」をはじめ、国際機関、NGO など様々な立場の方との交流してもらった「座談会」を通し、参加者には国際開発分野における広い視点に触れてもらうことができた。

3 日目

3 日目は、2 日間で考えた成果物に対して「中間発表」が行われた。プロである現職者の方から詰めが甘かった点を厳しく指摘され、議論をやり直す必要があったチームも出たようだ。午後には、「メンタータイム」が取られ、現職者の方に現実的な視点から、さまざまなアドバイスをいただいた。翌日は最終日であるため、参加者は夜通しプランニングを続けたようだ。

4 日目

4 日目は、「最終発表」が行われた。各チームとも寝不足による疲れがある中、参加者は審査員に対し全力で最終成果物をぶつけた。最終発表の後は「フィードバック」が行われ、四日間を共にしたチームメイト同士で良い点・悪い点について率直な意見を言い合った。これをもって、idpc2011 は幕を閉じた。

	2月28日(月)	3月1日(火)	3月2日(水)	3月3日(木)
7:30 - 8:00				
8:00 - 8:30		起床・朝食	起床・朝食	起床・朝食
8:30 - 9:00				
9:00 - 9:30		プランニング 9:00-10:50	プランニング 9:00-10:00	プランニング 9:00-12:20
9:30 - 10:00				
10:00 - 10:30			中間発表 10:00-11:30	
10:30 - 11:00				
11:00 - 11:30				
11:30 - 12:00		講演+昼食 11:00-13:00		
12:00 - 12:30				
12:30 - 13:00	受付 12:30-13:15			
13:00 - 13:30	開会式 13:15-13:35			
13:30 - 14:00	講演会 13:35-15:00			
14:00 - 14:30		プランニング 13:00-17:00 (メンタータイム 14:00-16:00)		
14:30 - 15:00	チーム発表 15:15-15:30			
15:00 - 15:30	アイスブレイク 15:30-16:40			
15:30 - 16:00	目標設定 16:40-17:20			
16:00 - 16:30	移動		プランニング 11:30-21:15 (メンタータイム 14:00-16:00)	休憩
16:30 - 17:00		夕食 17:00-18:20		結果発表 16:00-16:40
17:00 - 17:30	夕食 17:50-19:00			フィードバック 16:50-18:00
17:30 - 18:00		座談会 18:30-20:20		閉会式 18:00-18:30
18:00 - 18:30	プレゼンテーション講座 19:10-20:40			片付け・撤収
18:30 - 19:00		プランニング 20:00-21:30		移動
19:00 - 19:30	プランニング 20:45-21:30			懇親会 20:00-22:00
19:30 - 20:00		宿泊棟へ移動、入浴		
20:00 - 20:30			宿泊棟へ移動、入浴	
20:30 - 21:00				解散
21:00 - 21:30				
21:30 - 22:00	宿泊棟へ移動、入浴			
22:00 - 22:30				
22:30 - 23:00	就寝	就寝	就寝	
23:00 - 23:30				

2.2. プランニング

プランニング

国際開発の現場で起こっていることをテーマに、5人1組のチームで問題解決のためのプランを提示してもらい、ケースメソッド形式。

今年度はインドのスラム街であるビジャカパトナムと農村であるパタバリ村に関わる問題解決をテーマにプランニングをしてもらった。

インドのスラムと農村の問題には深い関連性がある。農村の低収入は都市部への人口流出を生みだしており、若者不足などの深刻な問題を引き起こしているが、一方の都市部でも若者は正規の仕事に就くことが難しく、その結果スラムでの生活を余儀なくされている。その背景には、教育不足、自然災害、感染症の蔓延など様々な問題がある。

参加者にはインドに関する30ページにも及ぶ英文のレポートを読んでもらい、その上で、スラム・農村に存在する問題を整理し因果関係を明らかにしてもらった。その中で、NGOという立場で予算は500万円という制約条件のもと、優先的に解決すべき問題を決定し、最適な問題解決方法をチームごとに考えてもらった。

なお、深夜一時まで企画局ブースを設け、参加者からの質問対応を行った。ルール上の不明な点を明らかにするために利用することはもちろん、プランニングの方法、チームマネジメントについて助言をもらいに来る参加者も多くみられた。企画局ブースを閉じた後も集まって議論するチームも多く、真剣に取り組んでいる様子が見えた。

中間発表

3月2日の10時より審査員を招き中間発表を行った。各チームには発表5分、質疑応答3分、フィードバック3分の持ち時間が与えられた。中間発表では、チームが取り組むべき問題を決定し、プロジェクトの骨格まで発表することを求めた。

中間発表の目的は大きく分けて二つあった。一つ目は最終発表にむけてチームの方針を決めることである。二日間続けてきた議論を一つの案に絞りこみ、他者へ伝えることができる形に落とし込むことで、チームの方針をクリアにする。さらに、審査員からの現実的な意見をもらうことで方針を一度見直す機会を提供した。

二つ目は、プレゼンテーション能力の獲得である。最終発表前に発表の機会を設け、審査員からフィードバックを受けることで、参加者が成果物をより論理的かつ効果的に伝えるためにはどうすればいいのかを考える機会を提供した。

審査員

沼澤 まりこ 様

独立行政法人 国際協力機構 審査部

JPモルガンを経て現在は審査部にてアフリカについてのマクロ経済分析を担当されている。

八代 拓 様

株式会社 野村総合研究所 研究員

東南アジアにおける資本市場の整備、官民連携の推進を専門に活動されている。

井上 真 様

株式会社 アイ・シー・ネット

人事開発室

メンタータイム

3月2日(水)14:00~16:00にメンタータイムを設けた。これは、インドで実際に活動したことがある、開発コンサルタントと NGO の現職者の方にアドバイスをもらう事が出来る時間である。

メンタータイムの目的は、実際に現職者の方からインドに関する現実的な意見を頂くことで、プランニングを机上の空論ではなく、現実世界で実際に適用することができるレベルに高めることにある。

参加者は、中間発表で受けたフィードバックをもとに、自分たちの案を根拠付けるために不足している情報やインドの現場から判断した率直な意見をもらっていた。

メンタータイムは、ケースでは表すことのできない情報を補完するために、今回初めて導入したシステムである。参加者からは有益な情報を得られたという意見がある一方で、時間が短いという意見や、現地の人のお話が聞きたいという意見を多くもらった。次回以降のコンテストでは、各チームにメンターが常時一人つく制度や、現地の方を呼ぶなど、新たな策を講じる必要がある。

メンター

米山 敏裕 様

特定非営利活動法人 地球の友と歩む会 代表
インドの農村振興をはじめとし、多くの支援事業のマネジメントに従事されている。

萬宮 千代 様

株式会社 かいほつマネジメント・コンサルティング 国際ビジネス支援部
南アジアにおける経済開発と官民連携が専門。
最近は特に BOP ビジネスに注力されている。

最終発表

3月3日 12時30分より国際会議室で最終発表を行った。各チームには発表 7分、質疑応答 7分が与えられ、さらに時間を超過すると減点されるという厳しいルールが課せられた。

前日は睡眠をとらずに発表用資料を作成していたチームも多く、発表前はやや疲れている様子が見られた。しかし、発表が始まるとどのチームも面持ちが変わり、真剣な様子で発表を行っていた。参加者は、7分という短い発表時間の中で、自分たちの意見を伝えることの難しさを感じたようだった。また、審査員からの鋭い質問にも的確に受け答えをする参加者の様子からは、4日間本気で議論してきた自信も伺えた。

審査員からは、「社会人3年目でやるようなことを学生がやっていて、レベルの高さを感じた」「固定観念にとらわれない発想が聞けておもしろかった」などの意見を頂いた。

審査員

中田 豊一 様

特定非営利活動法人 ソムニード

可部 州彦 様

明治学院大学 教養教育センター附属 研究員/
非常勤講師
株式会社フィリアックス 代表取締役社長

林 憲二 様

独立行政法人国際協力機構 アフリカ部

八代 拓 様

株式会社 野村総合研究所 研究員
中間発表の項参照

奥本 将勝 様

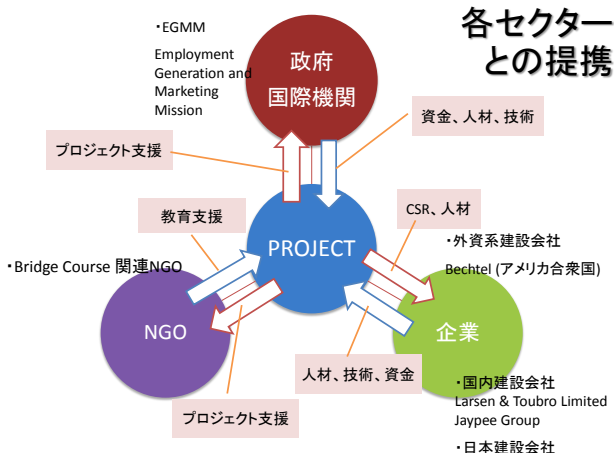
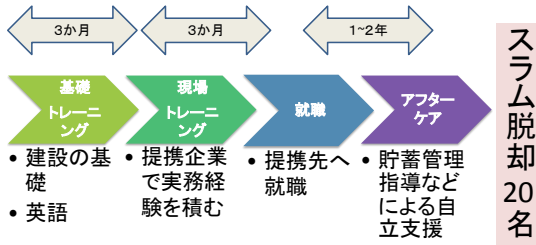
独立行政法人国際協力機構
エジプト日本科学技術大学プロジェクト

プラン紹介

第一位 ハイブリ 9

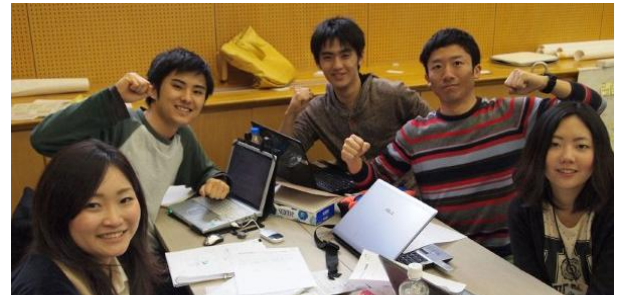
Andhra Pradesh 州 Visakhapatnam 市内のスラムにおける所得向上のための職業訓練事業

参加者20名の流れ



スラムの人々に建設業の技術を身につけさせ、雇用に結び付けることでスラム脱却を目指すプロジェクト。政府や企業、NGO といった既存の組織をうまく活用することで実現可能性を高めている。現地において、建設業は新規の雇用需要があることをデータで裏付けたことで高い評価を受けた。

また、やる気のない受講者をあらかじめ除くために、入学金として1000ルピーを徴収する仕組みを考えているところに創意工夫が見られる。さらに、このプロジェクトでは解決することができない課題への考察も行っており、完成度の高いプロジェクトであった。



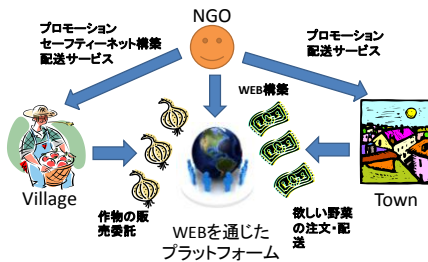
メンバー

- 鳥居 浩隆
- 浪江 航一
- 唐渡 理美子
- 布井 佑佳
- 神崎 拓海

第二位 PURE

パタバリ村でのオンラインマーケットプレイス利用による所得向上プロジェクト

各セクターの関わり方



農村の作物と町のマーケットに注目し、WEBを用いたプラットフォームを構築する。これにより、効率的な物流システムができ、結果として農民の所得向上を目的とする。消費者もメリットがあるプランを考え、システムを持続可能にした。



メンバー

- 藤野太郎
- 大貫 潤
- 高橋瞳衣子
- 天野 宗亮
- 早川 紘平

第三位 ロゼ

インド南東部アンドラプラデシュ州における収入創出事業

日焼け止め販売プロジェクト

・・・ココナッツオイルで日焼け止めに製造、販売

- インド国内での美白ブームと化粧品市場の拡大
- 簡単に製造できる
- 州一帯でココナッツが採れる

ココナッツミルクで作った日焼け止めクリームを販売することにより所得の向上を狙う。インド国内での美白ブームと州内でココナッツが容易に取れることに着目した。ハーブを取り入れて医療衛生分野へのアプローチも考慮したことが特徴的。



メンバー

- 吉澤 裕紀
- 塩澤卓
- 三箇山志織
- 倉員 豪
- 大原 香織

ハッピーテロ集団

パタバリ村における貧困脱出計画

農家の所得を向上させ、農家に農家としての自信をつけさせることが目的。農業生産性の向上と特産品の創出という二つの観点からアプローチ。生産性の向上について、農業教育をはじめ農協システム、回覧板といった複数の制度を構築し、既存のシステムの抜本的改革を狙う。特産品について、農閑期を有効利用し、石鹼やほうきなどの高付加価値品の生産を行う。



メンバー
山本 一馬 渡辺 月子
松月 さやか 矢野 勇樹
柴山 友貴

gaNeza

Patabari の農業改革とスラムでの雇用創出

農村の低所得問題とスラムの雇用不足を一度に解決することを目指す。農村で取れた原料をスラムに送り、スラムで付加価値の高い商品へ加工し、都市の市場で販売する。これにより、農村の農閑期やスラムの余剰労働力を有効活用することができる。スラムと農村の同郷信頼関係をうまく使ってシステムを構築したところの実現可能性が期待できる。



メンバー
織田 哲朗 浦坂 知晶
佐藤 美波 石川 尚樹

カシオレ

パタバリ村民の米による農業収入増加プロジェクト

農家の所得の向上のため、有機肥料を用いて米の生産を行う。都市部において有機食品市場が拡大していることに着目。有機肥料としては、エコ・サントイレを活用する。これにより、低コストでプロジェクトが実現可能になる。また、都市部への輸送を農民自身で行い、雇用を創出するとともに中間搾取を防ぐ狙いがある。



メンバー
塚田 みゆき 吉村 政龍
鈴木 芙実 池田 菜美子
白木 隆司

Smith

農業教育×人材育成プロジェクト

親の所得を向上させることで子供の初等教育修了を目的とする。トウモロコシの種を子供の初等教育終了を条件に農民に貸し付けることで、目的達成を狙う。トウモロコシは短期で収穫が可能で干ばつに強いという点に着目。また、農民は返済状況を相互に監視することで、無担保でも農民を信頼して種を貸し付けることができる。



メンバー
坂井 晴香 勝田 晋司
後藤 美裕 本多 紳一

みつばちハッチ

Dream Wide Project

スラムの若者が社会で安定した職に就くためのスキルを獲得することが目的。映像授業によって IT や簿記の学習の場を提供することでコストをかけずに教育を行う。さらに、企業へインターンとして派遣することで企業と若者の間でwin-winな関係を構築する。OB・OGによりサポートする体制を構築し、将来的には NGO の補助なしに運用できるシステムを目指す。



メンバー
茂木 翔太 水上友理恵
栗原 紗希 関 龍

ドラゴンウィリー

コミュニティーセンター設立による農村の教育改善及び所得向上プロジェクト

農家の所得を向上させるために、Patabari にコミュニティーセンターを設立。中高生から大人を対象に農業教育を実施。さらに、ワークショップの開催によるコミュニティーの活性化、堆肥を用いた低コスト肥料の有効活用を合わせて行うことで相乗効果を狙う。コミュニティーで運営費を積み立てる制度を作ることでシステムに持続可能性を持たせている。



長澤由佳子 小泉 泰雅
田島 大基 橋本 佳奈

しなじい321系

スラムへの負の連鎖を防ぐプロジェクト

農村における水不足、農業ノウハウ不足を解消することで収入の向上を狙う。貯水池を複数設置するとともに、併せて SRI 農法を実施することで、相乗効果で生産性が劇的に向上する。さらに、SRI 農法の教育を農民自身が行えるよう教育を施すことで、次世代へ教育をすることが可能となっている。



メンバー
山根 淳平 前原 緑
田中 佑典 大塚 清輔
鳥居 真樹

2.3. 講演・講座・座談会

基調講演

「本当に意味のある国際協力とは何か」

山本 敏晴 様



●講義概要

当分野におけるキャリアパスについて俯瞰的な視点で語って頂いた。企業における CSR あるいは NGO からのアプローチについても、それぞれの違いも絡めて詳しく紹介して頂いた。日本の常識あつての国際協力であり、早め社会に出てから当分野に従事するのも良いとのことであった。さらにアフガニスタンについてご自身の現場での医療経験を話して頂いたが、異文化を尊重する中での援助がいかに難しいかについて考えさせられる内容であった。国際協力について

NPO 代表として積極的に情報発信をされている山本さんとの対面に感銘を受けた参加者は多く、講演に盛り込まれた多量な情報を咀嚼しようと奮闘する姿が印象的であった。

参加者の声

- 国際開発についていろいろな知識を吸収出来てよかった。
- 憧れている方だったので実際にお会いできて嬉しかった。

略歴

山本敏晴（やまもととしはる）
医師・医学博士・写真家・国際協力師・NPO 法人「宇宙船地球号」事務局長

プレゼン講座

「効果的なプレゼンテーション」

石川 世太 様



●講義概要

プレゼンテーションを行うために考えるべき道筋を教えていただいた。通常よく教えられる 5W1H ではなく、6W4H1S という独自の切り口で、伝えるにあたり考えなければならぬポイントについて図を用いて丁寧に教えてくださった。

また、当日は座学だけではなく、実際に自分の夢について参加者同士で発表しあう機会を設けていただき、教えていただいたプレゼンのコツを実践することができた。コツだけを知っていても、実際に活用し、身につけることができなければ効果的なプレゼンテーションはできないということを体感できた。

参加者の声

- 驚きの連続で役に立つ講座でした。
- プレゼンの出来によって評価が分かれていくから、効果的なプレゼン法を聞けてよかった。

略歴

石川世太（いしかわせいた）
プロファシリテーター、環境 NGO エコ・リーグ代表理事。2004 年任意団体「Paper-Plan」設立、代表。2005 年環境国際 NGO「YouthCaN Japan」設立、副代表。2006 年コミュニケーション系講座講師・ファシリテーター等の活動を開始。2009 年度「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」円卓会議メンバー。全国大学生環境活動コンテスト実行委員・選考委員。



テーマ講演

「社会起業家としてのキャリア」

本村 拓人 様



●講義概要

本村さんには自身のキャリア、会社を立ち上げるに至った経緯を話して頂いた。途上国の現場をフィールドとしたビジネスの葛藤や面白さについてリアルな事業内容をもとに講演をして頂いた。貧困を「イメージーションの欠けた、自分の生き方を選択できない状態」と定義し、



それを可能とするためのプラットフォームをデザインするという指針を掲げ、26歳という若さで会社を経営されている本村さんの想いと行動力に共感した参加者は数多く、質疑応答も事業モデルや業界の今後等について幅広い話題について盛り上がりを見せた。

略歴

本村拓人（もとむらたくと）University of Morrisville へ進学。在学中、バングラデシュの都市ダッカからアフリカ大陸を陸路をベースに歩みきる。こうした経験から、BOP=年間の所得が「3000ドル未満」の層の自尊心を育み続け、さらに安価で、生活向上に役立つ製品の流通から開発までを提供する事業を開始する。2009年に株式会社 Granma を設立。2010年5月15日第一回世界を変えるデザイン展実行委員長を努めた。

参加者の声

- 今後自分のやりたいことの参考になった
- 国際開発のキャリアを歩む20代の方の話聞ける機会は少ないので興味深かった。

座談会

「職業多様性～国際協力に関する幅広い視野の獲得～」

玉懸 光枝、山下 豊一郎、赤堀 久美子、竹内 ゆみ子

●座談会概要

国際開発・国際協力に携わる現職者の方を多方面からお呼びし、座談会形式でご自身の経験を話していただくとともに、参加者からの質問にも答えていただいた。

例えば、赤堀さんには国際協力に対するアプローチの方法についての質問が見られた。



緊急支援に非常に強い NGO に所属していた際は現場との繋がりを実感していたが、一般市民の興味の喚起という点で企業からのアプローチを考えたとのことであった。また同時に、日本の NGO は財政基盤がまだ至らない点があり、人材育成が十分でない場合があるので、企業に就職してから NGO という道筋が当分野におけるキャリアパ

参加者の声

- 日頃抱いていた疑問を直接聞いて解消でき、良かった。
- 実務に携わる方の話が聞いて、今後のキャリアプランを考える上での参考になった。



スとして1つのモデルであると話して頂いた。

座談会講師略歴

玉懸 光枝 様

(株)国際開発ジャーナル社 編集次長

2001年より約5年間、在カンボジア日本大使館や JICA カンボジア事務所で勤務。06年より月刊『国際開発ジャーナル』の記者・編集者として国際協力に関し取材を行う。最近は ODA に加え、BOP ビジネスや適正技術など、社会課題の解決に向けた企業や大学の取り組みについて取材をされている。



山下 豊一郎 様

株式会社DoEvery代表取締役

Kiva Japan運営スタッフ

愛媛大学大学院理学部数学科を卒業後、NTT に就職し、検索エンジン goo の開発などエンジニアとしての経験を積む。2001年 NTT を退職し、コンサルティングファームで経営コンサルティング・マーケティングコンサルティングなどに従事。2007年に現在の株式会社 DoEvery を設立。一方、システムエンジニアとしての、経営者としての経験を活かして社会的企業の支援も開始。2008年に始めた KivaJapan での活動のほか、NPO 法人 ETIC のリサーチプロジェクトなどにも、プロジェクトマネージャーとして参画されている。



赤堀 久美子 様

株式会社リコー CSR室

大学卒業後、株式会社リコーに入社。デジタルカメラの海外販売部門に所属したが、学生時代から関心があった国際協力分野への転職を決意。NPO 法人 JEN にてイラク支援に携わる。2008年リコーに再入社し、CSR室に所属。BOP ビジネスを推進する「志チーム」のメンバー。

竹内 ゆみ子 様

特定非営利活動法人ソムニード専務理事

1993年のソムニード前身団体設立当初から活動に参加。専門のデザイン技術を活かして広報分野に従事。2000年インド、プットシル村の村長の間に応えられなかったことで、国内地域づくりに正面から向き合う。その後、飛騨で初めてコミュニティサロンを開設。飛騨地域を現場として国内外NGO研修プログラムを開発、人材育成事業を担う。ソムニード法人取得後、事務局長を経て現在に至る。(特活)名古屋NGOセンター理事、(特活)地域の未来・志援センター理事、まちづくり市民団体協議会「飛騨ゆめネット」副代表、JICA-NGO組織力アップ研修検討委員会委員長。NGO連携フォーラム企画委員。著書に「迷いが希望にかわる時」(中日新聞本社、共著)。



2.4. その他のコンテンツ

Day1：開会式

日本各地より 47 人の参加者が集まり、開会式が開催された。初対面ということもあり、緊張感が漂う中、代表挨拶やコンテストの流れについて確認がされた。



▲原稿を入念にチェックする司会者



▲緊張気味に開会のあいさつをする代表

Day1：アイスブレイク

開会式後、脱出ゲームや名刺交換大会といったアイスブレイクが行われた。まだ緊張感が残る中、参加者の中に次第に笑顔が見られるようになった。



▲名刺交換をする参加者たち

▼アイスブレイクを通して談笑する参加者



▼参加者は 4 日間の目標を真剣に思索する

Day1：目標設定

短い日程の中で確実に成長できるように初日にこのコンテストを通して何を得たいかを考え、目標を設定した。さらに、チームのメンバーにその目標を発表してもらうことで共有を図った



Day 4 : 結果発表

30分に及ぶ審査を経て、入賞チームが発表された。入賞チームには、ソムニードの中田さんから表彰状が手渡された。審査員の方々からどのチームも甲乙つけがたかったというコメントを頂いた。



▲審査員から全チームに対しアドバイスを頂く

▼チームメイトへのフィードバックを真剣に記入



▼チームリーダーからメンバーへの挨拶



▲入賞チームへの表彰

Day 4 : フィードバック

4日間の中で得た気づきの共有、および自身の客観的な評価の把握のため、チームメイトの良かった点、改善すべき点を伝え合う場を設けた。参加者からは、今後の励みになり大変参考になったという意見も見られた。

Day 4 : 閉会式

代表挨拶で、長かった4日間を振り返った。また、コンテスト期間中に撮影した写真を含んだEnding Movieを鑑賞し、コンテストで感じた喜びや悔しさを参加者がそれぞれかみしめながらidpc2011は幕を閉じた。

▼Ending Movie の鑑賞



2.5. 参加者の傾向分析

弊コンテストでは、「将来、国際協力分野で働くことを本気で考えており、現在何らかの形で当該分野に主体的に関わっている若者」を主たる対象としているが、実際に該当する対象者を集めることができたのか分析を行った。分析にあたって、まず参加者の基礎情報（学年・専攻・地域）を調べ、概ねの傾向を把握した。次に、参加者のキャリアプラン・現在関わっている活動の2点を調べ、それぞれから国際協力分野で本気で働くことを考えているのか、また現在何らかの形で当該分野に関わる主体的な活動を行っているのかについて分析を行った。

● 基礎情報

まず、参加者の年齢層に着目すると殆どが大学の学部生で、学年は1年生から4年生にまで渡った。特に2年生が多く、全体の5割弱を占めていた。昨年度と比べると、年齢層は若干低くなったようだ。次に、大学の専攻に着目すると、国際経営や国際法律といった国際という名前がつく学部・学科に所属している参加者が多い。しかし、中には工学、生命医科、文学といった当該分野と馴染みの薄い学部・学科に所属している参加者も見られ、多種多様な興味を持った学生が集まった。最後に、参加者の通っている大学の地域に着目すると、コンテストが東京で開催されたということもあり、8割の参加者は関東近辺の大学に通っている。昨年度と比較すると関東近郊に住む学生の割合が高まったようだ。しかし、2割の参加者は関西や中部地方、さらに海外の学生であり、ここから参加者の意識の高さがうかがえる。

地域	大学名	人数	
国内 (46名)	関東 (38名)	青山大学	3
	慶応大学	9	
	首都大学東京	1	
	上智大学	1	
	聖心女子大学	2	
	千葉大学	1	
	中央大学	3	
	津田塾大学	1	
	東京大学	3	
	東京農業大学	1	
	獨協大学	1	
	法政大学	1	
	武蔵大学	1	
	明治大学	2	
	横浜国立大学	2	
	立教大学	1	
	早稲田大学	5	
	中部 (3名)	名古屋外国語大学	1
	南山大学	1	
	都留文科大学	1	
関西 (4名)	京都大学	1	
神戸大学	1		
同志社大学	1		
立命館大学	1		
九州(1名)	立命館アジア太平洋大学	1	
海外(1名)	イースト・アングリア大学	1	

● キャリアプラン

「5年後、10年後、30年後のあなたの将来像とそれを実現するためにあなたが現在努力していることを教えてください」という質問に対し、7割の人が明確な将来像を持っており、そのほとんどが国際開発に携わるというものであった。このことから、概ね当該分野で働きたいと本気で考えている若者を集めることができたと言える。その7割の人の内訳を詳細に見てみると、1/3弱の人が国際機関に勤めることを希望しているのに対し、約1/2の人がビジネスを通じてアプローチをしたいと考えている。さらにビジネスの中でも、自ら起業したいと考えている人が多数存在した。これは昨今、2006年にノーベル平和賞を受賞したユヌス氏など「社会起業家」と呼ばれる人たちの活躍が脚光を浴びるようになり、若者は国際開発分野の問題を解決する方法としてビジネスに関心を持ちだしたことを表している。

● 現在かかわっている活動

「現在までに国際開発に関して、何らかの活動をしている場合には、その経験について教えてください」という質問に対し、ほぼすべての人が何らかの形で活動を行っており、対象とする当該分野に主体的に関わっている若者を集めることができたことが分かった。その内訳を見ていくと、NGO・NPOでのインターンシップ経験が最も多く、1/3の人が経験していた。また、そのほかにも、国際開発に関する学生団体を設立もしくは運営、JICAなどの機関でのインターン、また当該分野に関するイベントの主催を経験したことがある参加者も複数見られた。さらに、これらの活動を一度に複数行っている非常に意欲的な参加者も見られた。

2.6. アンケート分析

idpc2011 の参加者、延べ 46 名に対し、今回のイベントに関するアンケート調査を行った。意見・感想を尋ねた項目は大きく分けて以下の 4 つである。これにより、弊団体が掲げる問題意識を解決できたかどうかを考察する。

- i 全体について
- ii プランニングについて
- iii サブコンテンツについて
- iv idpc2011 の目的について

● 全体

コンテスト全体について、「コンテストは全体を通してあなたの期待に応えるものだったか」という質問に対し、すべての人が「そう思う」もしくは「まあそう思う」と答えており、概ね参加者の期待に沿えられた模様。

しかし、「メール対応が遅い」「タイムマネジメントが未熟」など参加者から多数のご指摘を受けており、よりよいコンテストを開催するために改善をしていく必要がある。

● プランニング

約半数の人が取り組みにくいと答えていた。この原因は主に 2 つあり、1 つ目はプランニング時間が短かったこと、2 つ目はケースの前提条件の変更があったことである。両者とも改善の余地があり、事前確認をさらに綿密に行うことによって次回以降改善することができると考える。

お招きした審査員に関しては、好評を頂き、審査員の意見はほぼ全員が「参考になった」「まあ参考になった」と答えている。

● サブコンテンツ

サブコンテンツの数については、8 割近くの人が「ちょうどよい」と答えており、概ね適切な量を提供できたと考える。

その内容について詳しく見てみると、参加者から最も人気の高かったものは最終発表で、現職者の方からの妥協のない質問や丁寧なアドバイスが参考になったという意見が多かった。また、次に基調講演の人气が高く、導入として当該分野に関する様々な知識を提供していただいたことが理由であるようだ。

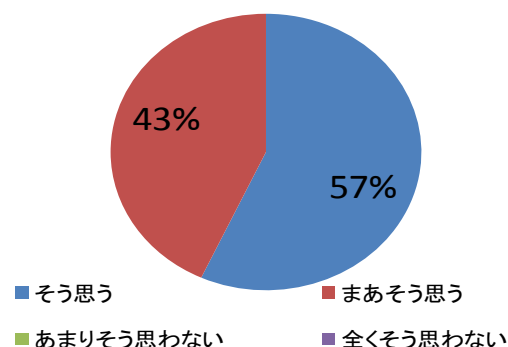
● idpc2011 の目的

今回のイベントを通して「国際開発分野において必要なスキルを学べたか」「チーム内の仲間との出会い・交流は十分だったか」「国際開発分野の機関・組織との交流は十分だったか」については 7 割以上の参加者が「そう思う」「まあそう思う」とこと答えている。

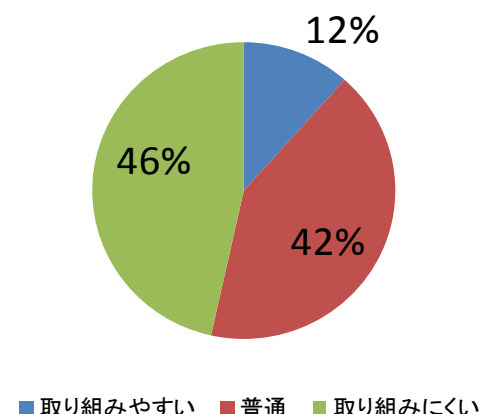
一方で、「参加者全体での仲間との出会い・交流は十分だったか」については過半数の人が「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と答えており、一昨年に抱えた問題が再び顕在化した形となった。

この問題を解決するには、一つは昨年度のようにコンテスト中に交流会を開催すること、もしくはコンテスト以外の場で交流の機会を提供することが考えられ、どちらの方法をとるべきか慎重に判断する必要がある。

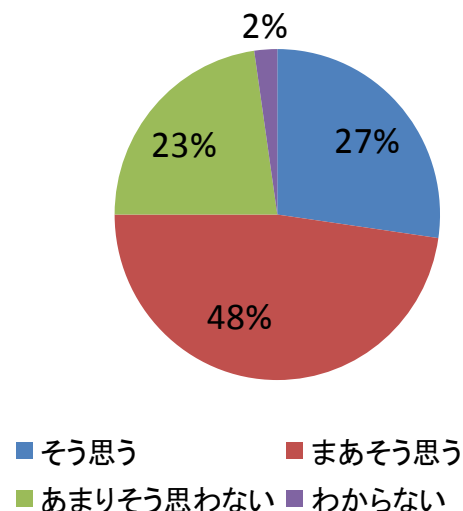
コンテストは期待に応えられるものだったか



ケースの取り組みやすさ



当該分野で必要な能力が取得できたか



3. 運営

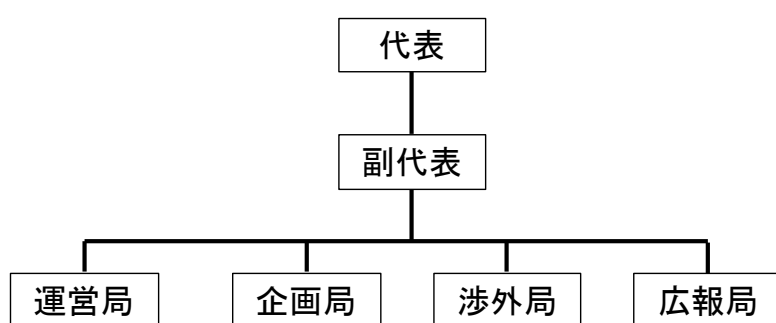
3.1. 主催団体

● 団体概要

国際開発プランニングコンテスト実行委員会の概要は下図の通りである。図のような組織形態をしているが、各局とも少人数であるため必要に応じて局を越えて業務を行っている。

スタッフの学年は、学部1年から学部4年まで広く在籍し、専攻も法律、学芸、工学など多岐にわたる。

活動は都内で週一度行うミーティングを中心とし、メールで情報交換を補完している。その他には、講師や協賛企業との交渉、プランニングのケース作成、参加者募集の宣伝活動などが主な業務である。



正式名称：国際開発プランニングコンテスト実行委員会

活動内容：国際開発プランニングコンテストの企画・運営

設立：2008年4月28日

構成：関東圏の大学に在学する学生15名

代表：小林俊也（慶應義塾大学法学部法律学科4年）

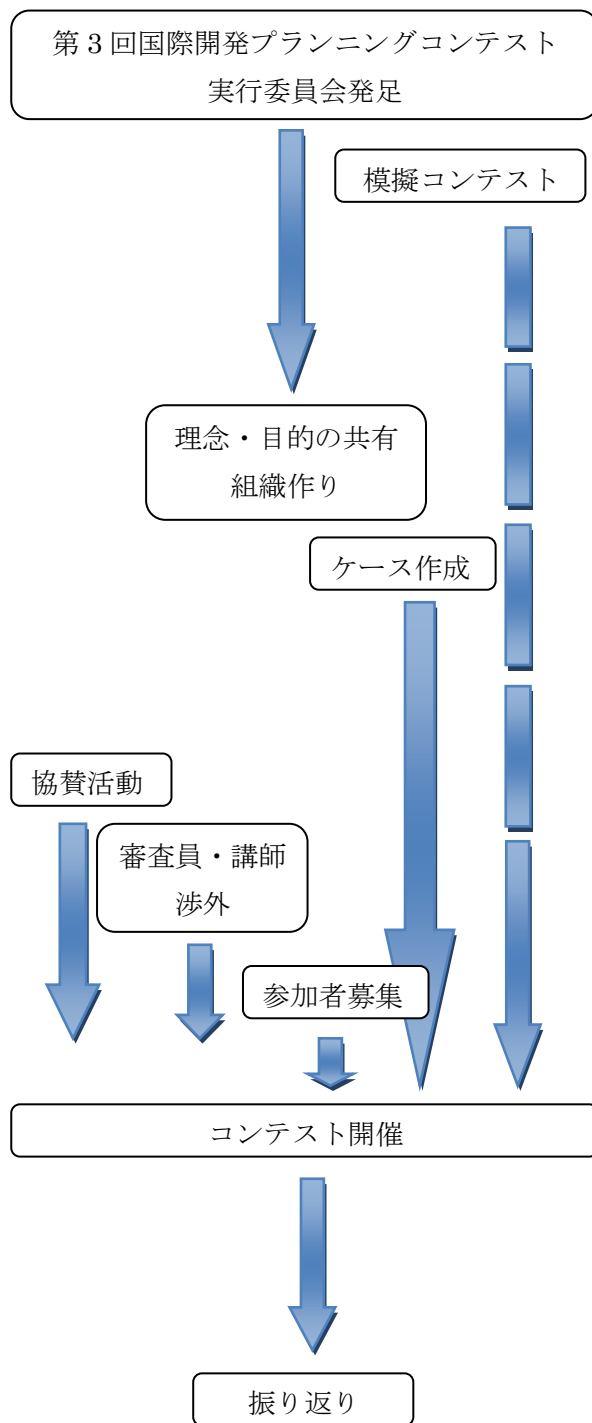
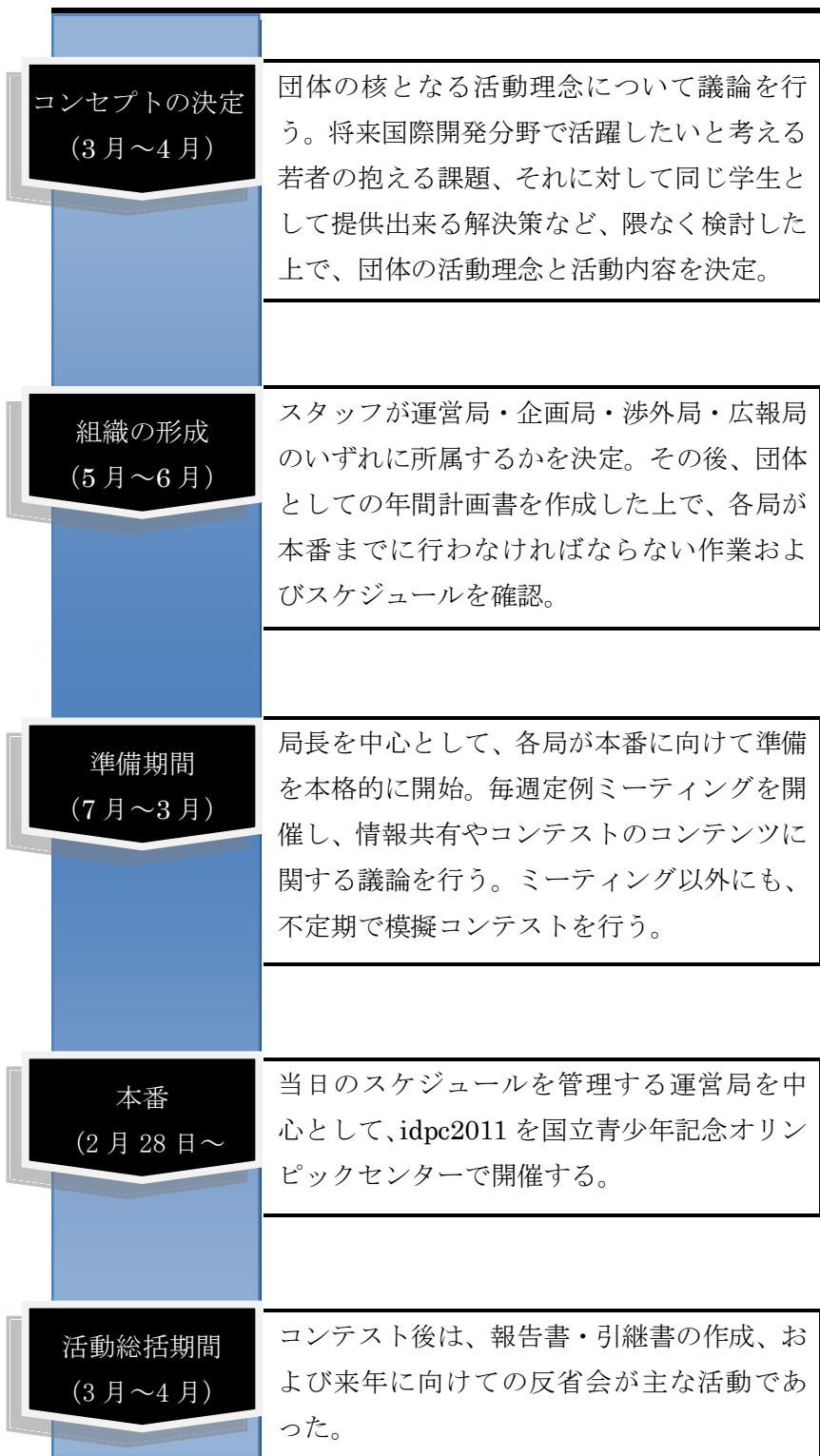
ホームページ：<http://idpc.in>

スタッフ所属大学：東京大学、慶應義塾大学、早稲田大学、津田塾大学、明治学院大学、法政大学

● スタッフ紹介

代表	小林俊也
副代表	中村
運営局	野島、徳本、星
渉外局	周東、足立、國方、東條
企画局	平原、小林

● 年間活動



3.2. 活動詳細

● 理念・目的の共有

幣委員気は活動理念として「国際開発の分野で活躍できる人材の育成に貢献することにより、途上国の発展に寄与する」を掲げている。人材育成には、様々な問題が存在しているが、私たちは特に国際開発分野で活躍するために必要とされる能力やスキルの不足と国際開発分野に関する人同士の交流の機会の不足を重要な問題だと考えている。

今年度は、理念は前年度から引き継いだ。問題意識については第三回のメンバーで白紙の状態から話し合い、納得のいくものにした。これは、前年度において幣団体の問題意識が十分に議論されていないとの意見が出ていたためであった。

5月には問題意識が決定され、さらに団体内でこれら理念・問題意識を共有するために、5月以降に新しく入ったメンバーには、理解度チェックをミーティングで定期的に行うことで理解を促した。

● 定期ミーティング

本年度は、毎週水曜日に定期ミーティングを行った。定期ミーティングでは、メンバー全員が参加することを前提とし、各局の進捗状況の確認や全体で話し合うべき議題について話し合った。

全体で話し合った議題は、3月～4月は主にスタッフのリクルートについて、4月～5月は団体の理念や問題意識について、6月～11月は各局の活動について、12月は参加者募集について、1月以降は本番に向けての確認事項について主に話し合った。

● 模擬コンテスト

本年度は5回の模擬コンテストを実施した。初めの2回はスタッフがコンテストとはどういうものか、ということを理解するという目的のもと、過去のケース課題を用いて行った。あとの3回は、コンテストで使用するケース課題を実際に使ってプランニングをし、スタッフからフィードバックをもらってブラッシュアップにつなげるという目的のもと行った。真剣にプランニング、議論をし、ケース課題のブラッシュアップはもちろんのこと、スタッフのスキル向上にも大いに役立った。

● ケース課題の作成

ケース課題については、まず国際開発、国際協力の分野で今問題になっていることをNGOなどにヒアリングに行き、調査をして参加者に一番どうなって欲しいか、こちらが伝えたいことは何かを決定し、ケースにどのようなことを盛り込むかということを決めた。次にケース課題の作成に入った。NGOにコンタクトをとり情報提供に協力していただいて必要な現地の情報を集めた。制約条件や導入部分を考え肉付けしていき、最後に現地情報の部分を英語に翻訳し、推敲に推敲を重ね、完成に至った。また、中間発表、最終発表、結果発表、評価表の作成、プランニングの流れ、メンター制度についてもケース課題と並行して随時決めていった。

● 広報活動

広報活動には、スタッフ募集とコンテスト参加者募集の、大きく分けて2つの活動がある。スタッフ募集は、前年度のコンテスト終了後に随時行われ、本年度コンテスト開催の半年前である9月には現メンバーが揃った。コンテスト参加者の募集は、WEB媒体を中心に12月から行った。1度目の募集では、参加に相当だと思われる者が50名に満たなかった。その為、告知場所を再度検討し、二次募集を行った。

1) 広報先

- ・ 掲示板——34 件
- ・ メーリングリスト——1 件
- ・ その他——Twitter、学内チラシ等

2) 応募者数→合格者数

- ・ 1次募集：44名→34名（募集期間：2010年12月15日～2011年1月4日）
- ・ 2次募集：20名→16名（募集期間：2011年1月12日～1月21日）

※合格者のうち、実際にコンテストに参加したのは46名

3.3. 決算報告

支出の部		
【運営関連費】		
宿泊費		¥291,000
部屋関連費		¥126,800
食費		¥154,560
ネット接続費		¥50,752
当日備品		¥17,275
【渉外関連費】		
講師関連費	謝礼費	¥145,000
	飲食費	¥7,710
報告書関連費		¥7,070
【企画関連費】		
資料印刷費		¥3,000
【広報関連費】		
WEB管理費	サーバー管理費	¥6,135
	メールアカウント料	¥2,250
【諸費】		
ATM手数料		¥1,470
	支出計	¥813,022

収入の部		
参加費	参加者	¥598,000
	スタッフ宿泊費	¥84,000
協賛金		¥140,000
	収益計	¥822,000

3.4. 協賛・協力

協賛

株式会社アナライズ様

株式会社英治出版様

株式会社ビービット様

株式会社リンクアンドモチベーション様

物品協賛

株式会社留学ジャーナル様

後援

JICA 地球ひろば様

国際開発高等教育機構様

協力

株式会社 HIS 様

特定非営利活動法人ソムニード様

特定非営利活動法人オイスカ様

英治出版



beBit

